



るものすべてが その生涯を 目にすることはできはしない。もしそれが可能であるとすれば それは 完璧ではないにしても 何のためらいもなく共同生活を可能にする人間の磨かれた魂だけである。人間はたくましく 素晴らしく そして その叡智は無限ではあるが その叡智と互に相容れる心をもつ人間にしても 人間一生の三大行事といわれる誕生と結婚と死のうち 自分の目と心で確かめ得るものはたった一つしかない。それは 悠久の自然に比べれば 余りにもはかなく 余りにも無力としかいいようがない哀れさをさえ思わせる。岩山を削って造られた道の痛々しい姿 左手に大きく口を開けるV字谷 旅人の心を安らげる一方 否応なしに疲労を強いる自然のなせる業である。道の両側に立並ぶマンゴのトンネルを抜けると 今まで荒々しい坂道を喘ぎながら登って来たことがまるで嘘のように 明るい緑の野が打続いていた。

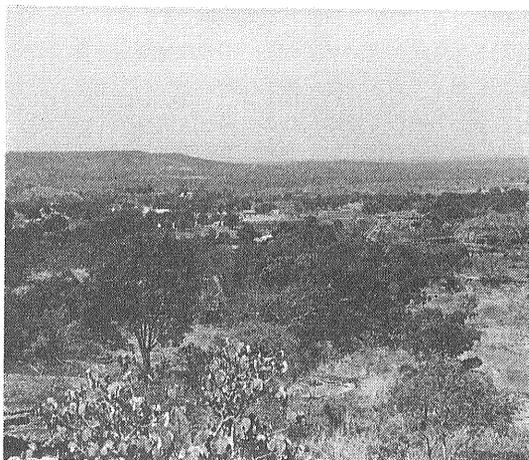
三又路の角にこんこんと湧き出る清らかな水 その水にうるほされて育っていた葱は この前ここを通過してからまだ日が浅いのに 既になかった。

三又路を右へ向い 間もなく左へ曲ると これから先オウアツダまでは一本道である。曲り角に建っている真白の案内板は 深い緑の中に くっきりと浮んでいる。深い木立の中にも ラテライトの路上にも 鳥1羽 猿1匹見当らず 梢を鳴らす風もない。路上は強烈な光に射抜かれているというのに 森はまだ眠っているのだろうか。

ボロ川の丸木橋を渡りダシエゾウの部落を過ぎておよそ 20km 様々の想い出の舞台となったバミンギ・パンゴラン県からはじめて訪れる ホート・コトー県に入った。二級国道21号線を行き交う自動車も数少ないらしく 枝を離れてからももう久しくたっているであろうと思われる葉は 厚く積り 唯 生ある時の色を失っているだけである。

ザマザ川の橋は これまでに見た丸太を並べただけの橋よりは 幾分橋らしいたたずまいを見せていた。この橋の袂からはじまるかなり急な坂道は幾分湿っていたが 車は 一気に 走り上った。そして 坂を上りきった所に道一杯の影を作っている巨木の元で 後続車を待つことにした。

ハラワタを挟むようなエンジンの響が伝わってきた。だが それは断続的で しかも 車は一向に姿を見せない。妙に気がかりになって 今来た道を引返してみた。車は 案の定 坂道の途中で スリップして喘いでいた。車が1台やっと通れるほどの幅しかないこの坂道は 湿



第2図 中生層の台地から見るンデレ付近の風景  
中生層の台地（前方の崖をなす岩山と後方左の台地）に抱かれたンデレの町は 県庁の所在地とは思えないほど こじんまりしている。後方の中生層の台地の右に見える低い丘は始生代の変動時花崗岩 その右はチャド盆地の堆積物である

っている上にえぐれており 荷物を満載している車にとっては 決して楽ではない。もしも スリップして後ずさりでもしようものなら 車は 加速されて ザマザ川へ転落するに違いない。

アントアンがハンドルをさばき 道のくぼみに石や木枝をつめて 残る8人で押すことにした。一度に20cmか30cmしか進まない車は 三度目 それまで満を持していたかのように 一気に走り上った。その瞬間 直径20cmばかりの角ばった敷石が にぶい音をたてて私の太腿を叩いた。「ウッ」と声をのんで がまんしているうちに 痛みが走り 右足が痺れてきた。素知らぬ顔で歩こうと努力してはみたものの やはり 右足は思い通りに動いてくれない。

木蔭で一休みした後 出発する。ここからオウアツダまでは 94km およそ2時間の行程である。

車が激しく揺れる度に しっかりと抱えているシンチレーションカウンターが当って 石に打たれた部分が痛む。しかし 学生時代に右手首を骨折したことのある私は 足の痛みが骨の異常によるものではないことを知って 安心しきっていた。

やがて 道は下りとなり ボウンゴウ川の橋が見えてきた。この橋は かなり立派ではあるが 自動車1台をようやく通すほどの幅しかない(第3図)。この付近は分水嶺に近いのであろう ボウンゴウ川の水の流れは予想以上に速かった。車から降りて 橋の中程で 川の上流と下流とを撮影した(第4図)。とくに風景が美しいわけではなく また これぞ中央アフリカの川とい

う特徴をもっているわけではないが この橋の上流2km 付近と 13km 付近にダイヤモンドの採掘現場があることを既に知っていたので 何かの役に立つこともあるかもしれないと思って撮影したままだ。

この調査旅行中にダイヤモンドの採掘場を見学するとすればこの採掘場以外にはないと考え 何とか都合してその現場を見たいと秘かに思っていたが やはり いろいろの都合で 目的を果すことはできなかった。

橋を渡った所からはじまる部落の小さな家の前に 空色の日本製の自動車が停っている。この家は 萱葺きに太い丸太の柱だけで壁はなく どうやら 農作物を貯蔵する小屋か または 陽除けの休息場らしい。家の中心部では 5～6人の真剣な顔付の男が 低い声で話に熱中している。日中のこうした場所では 大抵 罪のない世間話に興じている人が多く 人を射るような目付でひそひそ話をする人はいない。不思議に思っているうちに 同行のプロスペクターの一人が 「あの男たちはダイヤモンドの売買をしているのだ」と 教えてくれた。これでは 挨拶をするのも好ましくなさそうだ。

太腿は相変わらず疼き 風景も変りばえしないが 実に鮮やかな色のラテライトで造られた無数の蟻塚が 妙に何かを考えさせる。かなり大きな蟻塚でもほとんど掘り返されていないところを見ると 食用になる蟻の種類が限られているのか または この付近の村人は蟻を食用にしないのだろうか。3時ちょうど オウアツダの郡役所に到着した。しかし 郡長さんは旅行で留守であった。

古戦場を背後にした立体的な風景の美しいインデレに 20日間ばかり滞在していたせいか オウアツダの町付近

はいやに平坦に見える。マンゴの巨木に挟まれて一直線に走る道路 泥壁に萱葺きの家並 実にありふれたそのたずまいを 町の東側を流れるピピ川とそれに沿う密林とが救っている。

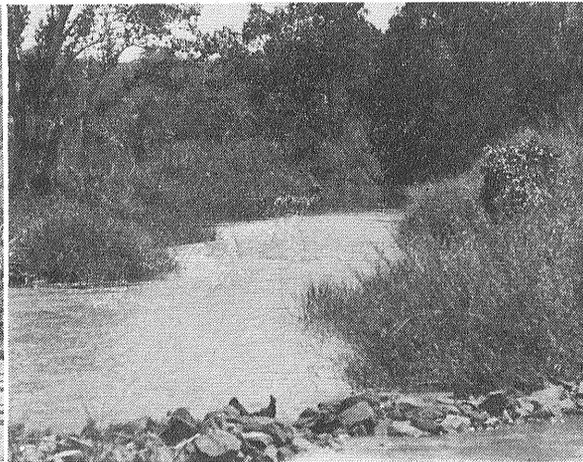
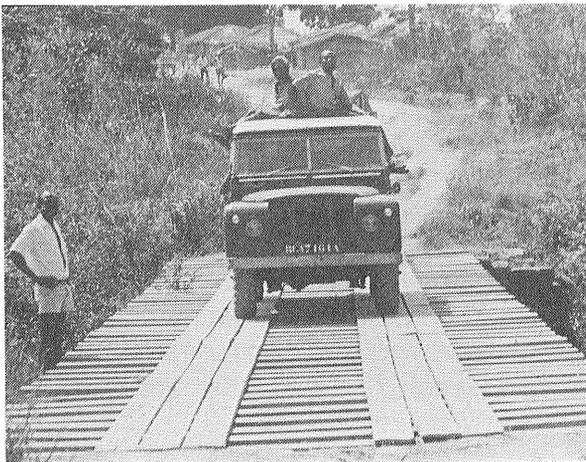
郡役所から北へ 2km ばかり行った所に建っている国営宿舎も 以前は外国人の住宅だったらしく 専用の給水塔が建ってはいるが 既にこわれていて すっかり錆びている(第5図)。

宿舎に入っすぐ キスリングの中から菓箱を取り出して 足の手当をしようとズボンをぬいでみた。角ばった石に打たれた部分は 思ったよりひどく 紫色に腫れ上がった部分は 20cm 以上もあり おまけに 数個所にうっすらと血がにじんでいた。湿布薬の冷やかさが気持よく痛みをやわらげてはくれるものの それは10分と続かなかった。足繁く行交う人にさとられないように 湿布薬を取換えるということは 中々大変なことだ。

働くことを一向に苦にしない同行の連中は 荷下ろしを終えたらしく ピピ川へ汗を流しに行ったらしい。

ジュル爺さんとパスカルに誘われて ピピ川へ行って みることにした。湿布している部分を包帯できつくしばっているので歩きづらいが どうやら 2人とも 私の歩き方が変なものには気づいていないらしい。宿舎から川へ向うだらだら坂の両側には 珍しくよく手入れされている野菜畠があった。だが 葱以外にはまだ芽を出していない。うっそうと茂る密林にすっぽりとつまれたピピ川の流れは 思いのほか速かった。水は割合にきれいだが 水面に揺れる黒い影のせいか いやに不気味だ。川幅は15mばかりしかない。

ジュル爺さんとパスカルは 素っ裸になって水に入り シャボンを万遍なく塗って 身体を洗いはじめた。チ



第3図 ボウンゴウ川の橋  
奥地でみかけた橋としてはかなり上等である。道路は2級国道21号線。上乗りしているのはコックのジュル爺さん(左)と助手のパスカル(右)この状態で、時には時速100kmで走り、約2ヶ月間を旅した

第4図 第3図の橋から見たボウンゴウ川  
この上流2km 付近に ダイヤモンドの採掘場がある

ヨコレート色の肌は水に光って やけにたくましく見える。色が黒いことでは自慢できる私も この国では完全に尻尾を巻かざるをえない。チョコレート色の肌の持主ならまだしも まるで消炭のような肌をしている連中が五万と居る中であっては 自分の肌がやけに白く見える。私は 川岸に腰をおろして 水中の小石を拾いはじめた。2人に 「川の中程の石を拾ってくれ」と頼んでみたが 2人は頑強に私の頼みを拒んだ。

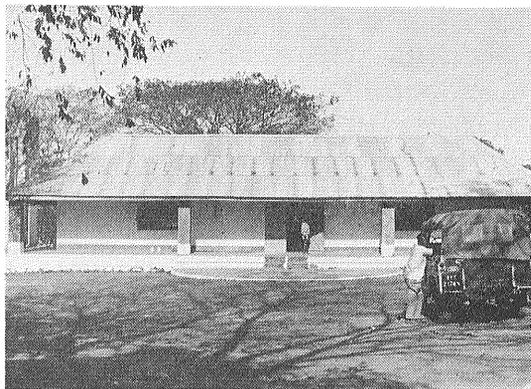
ふだんは嫌な顔をほとんど見せない2人なので いささか驚いたが それも当前 この川は河馬の巣みたいなものだということだ。昼間は一番深い川の中程に潜んでいる河馬は 日が暮れてからは 岸の上って餌をあさるのだろう。野生動物の中でももっとも恐ろしいのは河馬だと聞かされたが 日が暮れて間もない時 川岸に上った河馬が 通りがかりの人を殺すことが少なくないという。あの間抜け面をした大きな図体の持主のどこにそのような兇暴さが秘められているのか不思議だが こうしたことは 人間社会においてもみられないことはない。野生動物と人間のそうしたことの違いは 身の危機を感じた時その結果として殺すか はじめから殺すことを企んで殺すかだ。

20分ばかりかかって 私は 直径1cm ばかりの完全に透明でしかも楕円体の礫をみつけた。もちろん高価なものではないし また とくに何かの役に立つというものでもないが 何故か その透き通ってまるやかな小さな石に愛着めいたものを感じないではいられなかった。

2人の水浴びも終わった。今日一日の汗とほこりを洗い流してさっぱりとした2人は これから 夕食の仕度にかかる。

日もとっぷりと暮れた頃 郡役場の総務部長さんが姿を見せた。智識欲のかたまりみたいなこのたくましい男は 珍客に接して余程嬉しかったらしく 真暗な道を家へ返り 間もなく ビールと鹿の肉をバケツに入れて私達の所へ戻って来た。大粒の星が無数にきらめき急に冷えこんできたオウアツダの夜 はじめて逢った友と一緒に 鹿のステーキを喰い ビールを飲み 賑やかな時を過すのは実に快適である。

ンデレよりも南で しかも 地形的にも低いというのに オウアツダの夜の冷えこみよりは まったく想像以上であった。この国の気候区は それぞれ東西方向にのびているとばかり思っていたが もしかすると 最北端部のステップ気候区はこの辺まで張り出しているのかもしれない。美しい星空と冷えこみようから受ける印象は 砂漠気候区に居るような錯覚をさえ抱かせる。



第5図 オウアツダの国営宿舎  
トタン葺きのこの家は かつて 外国人の個人住宅だったらしく 水道設備があったが 既に破損して 使えなかった。もちろん 電燈はない

まったく、不思議なことがあるものだ。

客も帰った。食事の後かたづけも終わったらしい。ようやく寝つこうとする10時 バトウカーが 「レイモンドが病気で」といいながら ドアを激しく叩いた。痛い足を引ずりながら出てみると 皆心配そうな面持で病院へ行ったレイモンドとアントアンの帰りを待っていた。

2人は間もなく帰って来た。しかし 病院には医者も看護婦も居なくて 診察してもらうどころか 薬も貰えなかったということだ。いつも無口でおとなしいレイモンドだけに 辛そうにうるんだ目を見ていると 一しほ心配である。

真暗な廊下の片隅で 懐中電燈の光を頼りに レイモンドの脈拍をはかり 2〜3の症状を聞いて 風邪であると確信した。少年時代に 医学書を少々読み いろんな症状の患者の診療を見たことがあり また 重症患者の友人とともに寝起きしたことがあるせいかな 普通の病気ならば大よその見当がつく。経験というものはいつかは役立つものらしい。

普段使っているエアーマットにレイモンドを寝かせ 寝袋をかけ 冷たい水を含ませたガーゼで顔や頸筋を拭いた上で薬を飲ませた。それからおよそ30分の後 ぐっすり眠ったレイモンドを見届けて部屋へ戻ったが 寝つけぬままに午前1時を迎えた。太腿は相変らず痛み 腫れて熱っぽい患部にはった湿布も余り役には立ちそうにない。喉が渇き 表へ出て水を一杯口に含んでみた。青臭い水ではあったけれども その冷たさは格別であった。風はなく 無気味なまでに静まりかえった夜である。

### ツエツエ 蠅のたむろする道

午前5時起床。レイモンドはすっかり元気になったらしく 荷物の積み込みに熱中している。

この宿舎から15kmばかり北へ行くと 天然の岩橋がピピ川に架っている素晴らしい風景が見られると聞いたが 時間とガソリンが惜しくて 見に行くのを諦めた。ブリアへ向って南下する肌寒い日曜日の朝 オウアツダの町は まだ深い眠りの中らしい。

オウアツダから20kmばかり南方のアコウシュ部落でエンジンの調子がおかしくなり ランドローバーはだらしく停ってしまった。出発早々の自動車の故障は実に嫌なものだが これまでにうんざりするほど経験しているので あまり腹もたたなくなっている。

この部落の戸数は6戸 まったくわびしい限りではあるが 付近には 美しい風景があった(第6 7図)。うっそうと茂るマンゴ たわわに実をつけたバナナ ラテライトのオレンジ色の道 水鳥が羽根を休める広い湿地 それらのかもしだすムードと風景はこの国の典型的なものである。50才をとくにすぎているらしい老婦人が 声もかけずに ふしくれたった手でマンゴを差出した。

「メルスイ マダム」

「マラ テイ モウ アイエケエ イエン (貴方は何族ですか) ?」

「……」

「イル テイ モウ アイイキ イエン (お名前は) ?」

「……」

「モウ イイキ テネ ヤンガ テイ サンゴ (サンゴ語を話せますか) ?」

「……」

お礼をいっても 何を聞いても この老婆は ついに話しの相槌をうってはくれなかった。私のサンゴ語が余りにも下手すぎるのか 彼女がサンゴ語を話せないのか 私には分らない。だが この時近寄って来た若者の「モウ ゴイ ビッグウエイ ブリア (ブリアへ行くんでしょ?)」という間に対する私の「ムビ イエ ゴイ ビッグウエイ ブリア ナア ランゴ オコ (ブリアへ行って1泊するんだ)」という返事が ちゃんと通じたことから考えると いかにか拙ないサンゴ語とはいえ この簡単な会話が婦人に通じないわけではない。

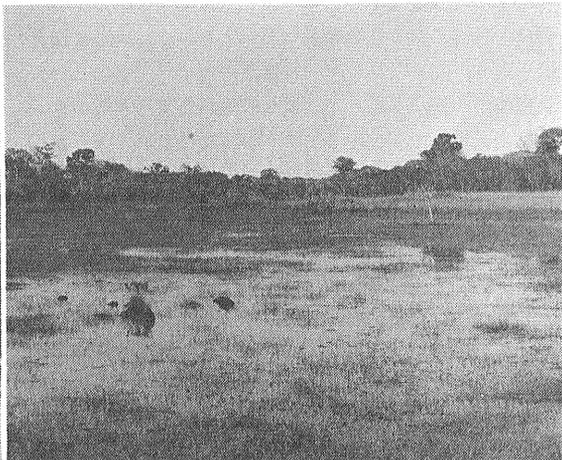
修理が終り アコウシュを出発したものの 道路は二級国道とはとても思えないほど 悪くなっていった。そして ヤリングへ向う道路との分岐点に当るビリニを過ぎとたんに まるで砂漠のどまん中を走っているような錯覚をおぼえた。道路をはさんで サバンナと密林がどこまでも続いている。ということは この付近が雨量に恵まれ そして 地下水にも恵まれていることを卒直に物語っている。それなのに道路だけがまるで他所者のように 前輪駆動を使わなければどうしても通れないほど乾き切った厚い砂でおおわれているのは何故だろう。

ビリニを過ぎて13kmばかり走った頃 道はこれまでとはうって違って 岩だらけとなり 湿地帯がやけに目立つようになってきた。灌木も生えていないこの湿地帯には 流れる水もないが いろいろな動物の憩の場になっているのであろう 様々の無数の足跡がある。

ムバリ川の低地を走り抜けようとする頃 運転手のレイモンドが 左前方を指さして 車を急に停めた。そして バトウカーが 銃を片手に 忍び足で素早く藪の中に姿を消した。見ると 大きなアンチロープがのん



第6図 オウアツダの南方20km付近のアコウシュ部落近傍の風景 家の周りには必ず数本のマンゴが植えてある。田舎でみられる典型的な風景の一つである。



第7図 アコウシュ部落近くの湿地 静まり返って無気味な感じがするこのような湿地は 鳥や野生動物の憩の場であるが 時には 恐ろしい病原菌が巢食していることがあるので 手に触るとするのは危険である。

びりと遊んでいる。

これまで 私達が見ている所では 動物らしいものを 仕止めたことのないバトウカーだから きっと 一発必倒をねらっていたにはちがいないのだが そのアンチロープは 後続車のエンジンの音に気付いて 藪の中に身を翻えした。そして バトウカーは間もなく しょんぼりと帰って来た。

ゆるやかにうねる丘を越えて間もなく 道は下りとなり やがて 満々と水を湛えた池の畔に出た。水面には 数10羽の水鳥が のんびりと 羽根を休めている。バトウカーが 今度こそはと 銃を持って池へ向ったが 射撃のうまい運転手のアントアンが バトウカーより一足先に 水鳥の群に身を寄せて行った。しかし 水面に浮ぶ鳥を見事に撃ち殺したとしても それを どうやって手に入れるのだろう。私は 連中のやることに 少々疑問を抱いた。だが アントアンの智慧は一枚上だ。アントアンは 水面に向かって威嚇射撃をした後 素早く 近くの林へ向って走った。水鳥は その銃声とともに水面を蹴って その林へ向って一勢に飛び去った。にんまりとしたアントアンは ゆっくりと散弾をこめて 頭上の鳥の群へ向って引金を引いた。

美しい色の鳥が2羽 まるで木の葉のように 落ちてきた。たった今まで 何の怖れも抱かずに 水面にたわむれていた水鳥が いつ この池に戻って来るのか 私にはまったく分らない。

ボウンゴウ川の支流を過ぎた頃 時速70km ぐらいで突走る車の窓から 蠅が 引切りなしに 飛び込んでくるようになった。大きな蠅だが いつとまったかまったく分らないほど 身のこなしが巧みである。蠅には

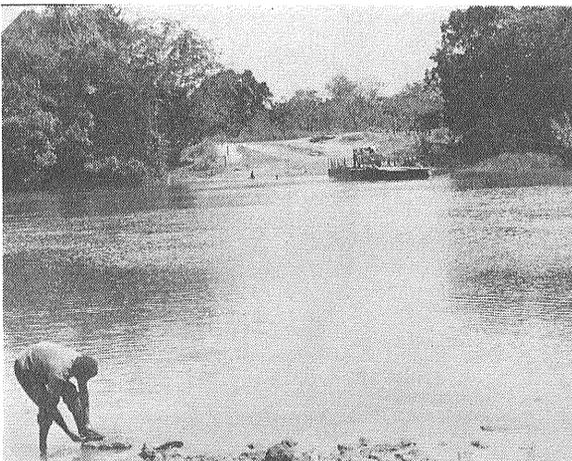
馴れきっている私はそれを一向に気にせずにはいたが バトウカーもレイモンドも 緊張した顔で 1匹づつ押しつぶしている。突然 バトウカーが 私の頸に 平手打をくらわせた。私は まったく余期しないその平手打に驚いて バトウカーを 思わずにらみつけた。そして バトウカーの「ツエツエ蠅です」という声を聞いたとたんに 恐怖にとりつかれた。

ある人は 「ツエツエ蠅は蚊とそっくりだ」と いい また ある人は 「アブとそっくりで 群をなして襲ってくる」と 私に教えてくれたが このツエツエ蠅は ふうふうの蠅によく似てはいるが 身体も羽根も幾分細長く 腹には薄黄色と薄墨色の横縞があった。

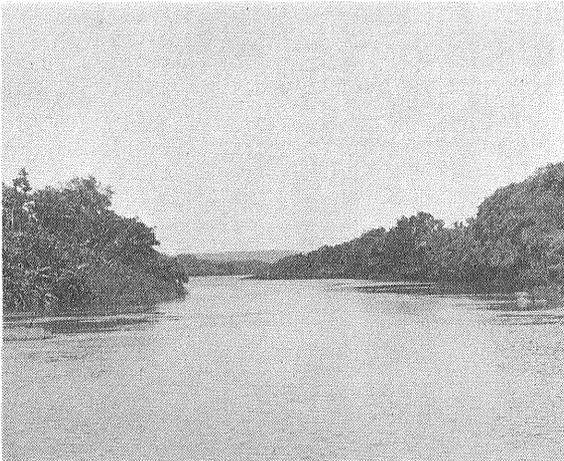
オウアツダ出発以来の悪路もようやく尽きて モウカの村を過ぎる頃からは 平坦な道路にもどった。そして間もなく ボウンゴウ川の岸に着いた(第8図)。

ボウンゴウ川は広く その水の流れはゆったりとしていた(第9図)。対岸に舳っていたフェリーボートの係員は 私達を見かけてすぐ そのフェリーボートを操って来た。フェリーボートとはいっても 別に 大した仕掛をもっているわけではないが 兩岸に渡された太いワイヤーを頼りに動かされているところをみると この川も 雨期には 数mの高さまで増水するのであろう。

対岸近くで泳いだ少年達は 私達を見て 一瞬きよんとしていたが 真白な歯を見せて 「ボンソアー ミッシュー」と 声をかけてくれた。水に光るその肌は美しく そして 実にたくましい。だが この子供達が よりたくましく育った時 そのたくましさを思いきりたたきつけることができる働く場が 果して あるのだろうか。オウアツダを出発してから7時間半 211kmの旅は終わった。終点はプリアである。



第8図 ボウンゴウ川のフェリー(第4図の下流170km 付近)  
最大積載量は6tで 午後6時を過ぎると自動車の搭載は許可されない。  
雨期には 坂道の半分ぐらいまで水没する



第9図 ボウンゴウ川の渡しから上流を見る  
水量は豊かであるが水深は浅い。この国の川の風景としては典型的なものの一つである。

### 忍 従 の 宿

ホート・コットー県の県庁所在地であるブリアはこの国では屈指の町だけに 仲々賑やかである。ゆるやかな丘陵地帯に拡がる立体的な町のたたずまい コットー川の豊かな水の流れと岸辺に密生する木の深い緑と水面に落す黒い影 川岸に舳丸木舟とその横で汗とほこりを流す黒くたくましい肌 洗濯とおしゃべりに余念のない女達 ここには 水と緑と人の織りなす風物詩が横溢している(第10 11 12図)。 珍しくトタン屋根の家が目立つのは この町の豊かさを示しているのだろうか または 屋根材となる壺が手に入り難いことを物語っているのだろうか(第13図)。 町の中央部に建つ県知事邸を訪ずれて 挨拶をした。

広々とした庭に茂るマンゴの巨木と真紅の花をつけたブーゲンビリアに包まれて 一きわ白く光る県知事邸は偉容を誇っている。

風通しのよい40畳敷ばかりの応接間の片隅におかれた立派なソファに腰掛けて 36日ぶりに飲んだ氷水の冷たさが 渴ききった喉を 突刺すように流れてゆく。 氷水がこれほど冷たいかと疑うほど その冷たさと美味さを忘れていたらしい。 本当に生返った心地である。

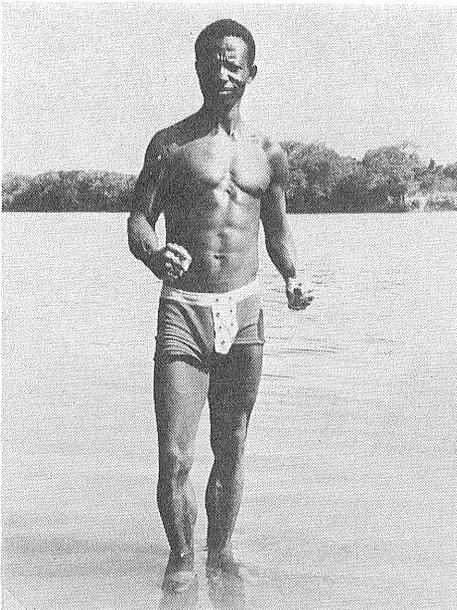
ジョニウォーカーの封を切ってすすめて下さる県知事の好意に答えて ふだんアルコールに縁のない私は いつになくグラスを重ねた。 顔がほてり 心臓が早鐘を打つようにどきどきしてきた。 初対面の県知事の前で 乱れてはいけないとは思いながらも 雲の上を歩いてい

るように 身体から力が抜けてゆく。 ウイスキーをさらに注ごうとされる県知事に 思わず 「ムビ イエ テンヨウ ゴウ ケテケテ (水を少し飲みたいんです)」 といってしまった。 私のサンゴ語がおかしかったのか または 日本人がサンゴ語を話すのが奇異に感じられたのか 県知事は 一瞬 驚かれたようだ。 しかし 色黒の顔がさらに汗とほこりとで汚れているとはいえ やはり 酒の酔が顔にも表われていたのであろう。 県知事は にこにこしながら 空になったグラスに 氷水を注いで下さった。

宿舎は県知事邸から歩いて5分ぐらいの所にあった。 山荘風の木造建で 壁も床もまだ新しくはあったが 屋根裏には 相変らず 蝙蝠が巢食っていた。 これまでに泊った宿舎が どうやら 外国人の個人住宅だったものらしいのにくらべて この宿舎の真新しさと立派さは どうしたことだろう。

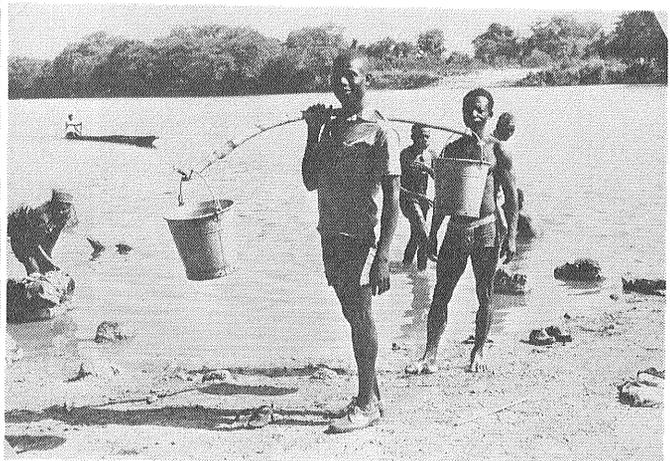
ぎらぎらと照りつける太陽もようやく姿を消し 夜がきた。 相変らずむし暑く 締めきった部屋で寝るのは 楽ではなさそうだ。 夕食を終えればとくになすべきこともないが はじめて訪ずれた町での第1夜は 妙に眠れぬものだ。 明朝の早起を多少気にしながら 早々にベッドに横たわった。 蝙蝠の鳴き声も異様な臭いもこの頃ではあまり気にならなくなってはいるが むし暑さだけはいささか閉口だ。 幸に蚊も蜂も見当たらないので 裸で寝たものの 夜中には 寒さで目がさめて 寝袋にもぐってしまった。 これまで徐々に 昼間と夜間との気温差が高くなっているように感じてはいたが 海拔高度も緯度もンデレより低いこのブリアで 夜中といえども これほど冷えこむとは予想もなかった。

午前5時30分起床 白む空の下では まだ一日は始ま



第10図 ブリアの町を流れるコットウ川と男

身長は 160cm 足らずで小男ではあるが 美事な肉体美である 何故か聞きそびれたが 一般に この男のよ



第11図 コットウ川風景

弾力のある天然木をうまく利用した天秤棒にバケツを吊して水汲みをするのは 日本でもみられる風景と同じである コットウ川だが 型造り

っていないらしく 風の音さえない、明けきらぬ空には 星の光があった。快晴の夜明け いよいよ この国唯一のウラン鉱床があるバクウマへ移動する日を迎えた。起きぬけに作業服に着替え 6時10分には朝食を終えた。

エンジンをかけたアントアンが 「昨日から車の調子が悪い」といいながら インデレで取換えたトランスミッションを点検しようとして 車輪をはずした。ところが 驚いたことに シャフトが折れていた。これでよく走ってきたものだ。調子が悪いことに気付いて だましまし悪路を運転してきたアントアンの技術を賞めるべきか。とにかく この町まで無事に辿り着けたのは大手柄だ。それにしても インデレからビラオまで まったく無人の猛獣地帯を 400km以上の道を走ろうという最初の計画を実行していたらどうなっていただろう。いさぎよく諦めたことに悔いを残してはいたが 車の故障を予想して計画を変更した決断は 私達を 救うことになった。やはり 時に応じていさぎよく退却することも兵法の一つらしい。

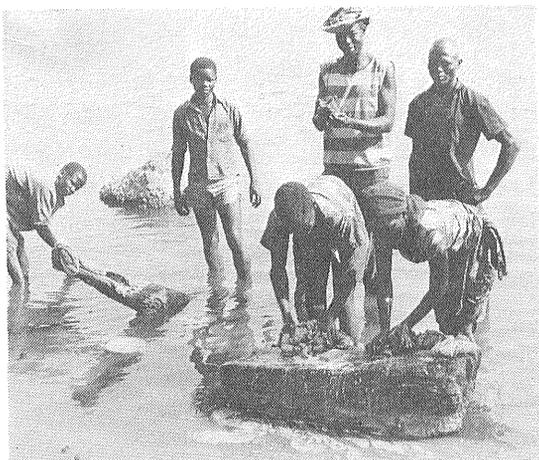
車の故障を知って バトウカー アナトール レイモンド アントアンの4人が 手分けして 部品を探しに散って行った。しかし 3時間余りの彼等の努力も空しく 遂に 部品を入手することはできなかった。ぐずぐずしては居られない。ブリアから 210km離れたバンバリへ部品を探しに行くことを一応は考えたが そこでも入手できないことを予想して 598kmのバンギへ行くことに決めた。

10時50分 アナトールとレイモンドとジャン・クロードの3人を バンギへ出発させた。これで 計画はま

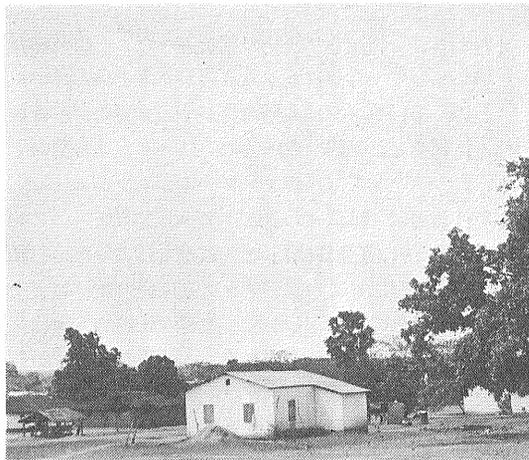
た大きく狂った。

ビラオの南方にあるンガデ銅鉱床の概査を割愛した今となつては バンギ北方で地球化学探鉱によって発見されている銅徴候地だけは 何としてでも見なければならぬ。最初は この調査旅行を終えてバンギに1週間ばかり滞在した後 この銅徴候地を調査する計画であったが 出発が遅延したため 1回53日間の旅行日程をたて 3月27日にバンギへ帰着するよう計画を変更した。そして今 再び計画の変更を迫られることになった。バンギへの往復に3日 修理に半日かかるとして 24日にはバクウマへ移動できるはずだが そう理想的にことが運んだとしても バンギ着は3月31日になる。そうすると バンギを出発して帰国の途に着く4月5日までは 正味2日半のゆとりしかない。もしも 3人の帰りが1日でも遅れたら大変だし また この調査旅行が終るまで車の故障の再発がないとはいえない。しかし 私達は 予定通りにバクウマのウラン鉱床と銅徴候地を見て 3月31日にバンギへ帰着することに決定した。

一日に数ページを使っていたフィールドノートが この日から 一日半ページかせいぜい1頁で足りるようになった。そして それを見るのがうとましくなってきた。日付と天候とごくありふれたメモだけを書きこんだだけのノートは もはやフィールドノートではない。いらだつ気持 どうしようもないやるせなさ それは調査で疲労困ぱした時以上に 苦痛である。一体自分は この国へはるばると何をしに来たのか 自分がやっていることが真にこの国の役に立っているのかと 幾度となく考え そして 悩みもした。それは 車の故障に対する腹立たしさに根ざした悩みというよりは



第12図 コットウ川で洗濯する人達 横縞(赤と白)のシャツを着ている2人の男は四人。



第13図 ブリアで見たトタン葺きの家 冷房設備のないトタン葺きの家は 葦葺きの家よりも暑そうだが 大きな町ではよく見かける。このような家の住人は経済的に恵まれているのか 経済的に恵まれていないから 永持ちするトタンで屋根を葺いて

むしろ 自分に対する憤りであったかもしれない。そして 「R国の調査団が3カ月間旅行した時には 車は一度も故障しなかったのに 今回は何故こんなに故障が多いのだろう」といわれた時には 本当に 自分の不徳が度重なる自動車の故障を招いたのではないかと 考えこんでしまった。しかし 幾ら考えこんでみたとして 幾ら悩んでみたとして 自動車の故障がなおるわけではない。今は 自分に耐えることをいい聞かせながら 3人の帰りを じーっと待つだけである。

宿舎の前を行き交う人達が 軒先の陽陰でぼんやりと腰かけている自分を 「呑気だなあ」という目つきで見ているように思えてならない。2日目から 私は 人通りの多い時刻には暑苦しい部屋にとじこもって 時折外の空気を吸いに出るようになった。まったくつまらないことのようにだが 地質調査するにしても付近に山や露出があるわけではなし そうするよりほかに気をまぎらわす方法がなかった。薄暗い部屋の中で 地図を拡げては溜息をつき これから先の日程を幾様にも作り変えてみては溜息をつく。最初の日程通り 3月27日に何が何でもバンギへ帰ると決めてしまえば気が楽になるのかもしれないが そうすることがむずかしいだけに プリアでの一日一日は実に長い。

かんかん照りの昼下り 空しいとは分っていないながら 宿舎の周辺に点在するラテライト化した岩を叩き砕いて放射能強度を測定してみる。こんなことをしなくてもラテライト化した岩石も分らなければ 放射能異常はないと分りきっているのだが やはり じっとしては居られない。もっとも 岩石もさだかでなければ放射能異常もないことが実際に分ったことを一つの大切なデータとみれば 正気の沙汰とも思えないそうしたことを 一概に否定してはいけないのかもしれない。

3月22日。相変わらず快晴の朝を迎へた。軒先に椅子を持ち出して 外気になぶられながら本を読んでいたところに 半袖シャツの大柄な男がやって来た。その顔付と体軀を見た瞬間 直感的に スーダン系の男だと思つた。そして 「ボンソワール ムッシュー」と声をかけた男に 私は わざと アラビア語で 「アレイクム サラーム(今日は)」と 返事してみた。私の感は適中した。この国のアラブ系住民の数はおよそ10万人といわれており しかも 彼等の圧倒的多数はンデレ以北に住んでいるはずである。彼等の住居区からはるかに南方のこの町で アラブの男に逢おうとは またアラビア語で話しができようとは予想もしていなかっただけに アラブの心を知っているつもりの方は 急に

嬉しくなった。

「エンタ タカラーム アラビイ (貴方はアラビア語を話すんですか)?」  
「アナ アンデイ モッヒイ サガイエル ワア アナ カンラム アラビイ シユワイヤ (脚味憎が小さいから少ししか話せませんよ)」  
「クワイエス ジダーン (とてもお上手ですよ)」  
「イシ タバガ (何か欲しい物でも)?」  
「アナ アバガ アシャラップ マイヤー (水を飲みたいんですが)」

私は濾過器から水を汲んで彼にすすめながら サンゴ語で 「モウ イエ テンヨウ ンゴウ ケテケテ (少しだけ飲みたいんだらう)?」と いった。彼は 「アテネ カマン ワーヘッド (もう1杯下さい)」とアラビア語で答えた。

仕事の途中で水を飲みに来たらしく その男は 「ショックラン(有難う)」と いて そそくさと帰って行ったが 察するところ サンゴ語をほとんど話せないらしい。部屋の中に閉じこもって居るよりは やはり 表を見ていた方が気がまぎれる。

午後3時頃 宿舎の玄関前を 中学生ぐらいの2人の娘が通った。ミニワンピースに包まれた発育の良い身体ははち切れそうだし 惜し気もなく出した脚は まるでカモシカの脚のように すらりとのびている。色は真黒だが仲々の美人だし 贅肉はもちろんなくて 全身が鋼鉄製のパネのような感じである。

側に居るジュル爺さんが 私を見て ニヤリと笑った。

「アラ イタ テイ ワリ (姉妹だね)」  
「ウイ サンゴ テイ モウ ミンギ ロウ コウリイ テイ セントラアフリキヤン (はい 貴方のサンゴ語はうまい 貴方は中央アフリカの男ですよ)」

猿とそっくりの顔をしたジュル爺さんも 時には こういう精一杯のお世辞をいうこともある。そういうばあい私は サンゴ語の先生であるジュル爺さんに 相槌をうったり 時には こちらがからかい半分に問いかけることもある。

「ジュル モウ テイニイ モウレンギ テイ ワリ ムビ イエ モウ ナ モウ イイキ カンバ テイ ビイ テイ ムビ (ジュル あの娘に 私は君が好きだ 君は僕の太陽だと云えよ)」  
「ウイ ウイ……」

ジュル爺さんは これ以上にシワができないと思えるほどに顔をクシャクシャにして ケツケツと異様な声を出して 笑いこけた。爺さんは 恐らく 君は僕の太陽だというサンゴ語を私が知っていようとは 夢にも思っていなかっただろう。

妙に寝つけず 間断なく光る稲妻に見入りながら 真暗闇の軒先に佇んでいる私の目に 車のヘッドライトが入った。「帰って来た」と一瞬喜び その光を凝視した。道路から左に曲ったその光は 間違いなくパンギへ行ったランドローバーであった。

ぐっすり寝込んでいた連中が 1人残らず とび起きて来た。ジュル爺さんは湯を沸かしてココアをいれ パスカルはパンと缶詰を出して 3人にすすめた。こうした仲間を見ていると 思わず じんと胸を打たれる。午前11時にパンギを出発した3人は 鎧装もされていない 598kmの道を 一気に車を走らせたらしい。私には 少しでも早く 仲間が待っている宿舎へ帰ろうと苦勞した3人の気持が嬉しかった。3人の胸の中には きっと 少しでも早く 預かってきた家族からの手紙を仲間に渡して喜ばせ プリアからバクウマへ移動しなければという 優しい心と責任感が秘められていたのであろう。

### 美人の里バクウマへ

車の修理が終了翌日の朝6時50分 プリアの宿舎を出発して 南へ向った。まだ早朝だというのに 広い道路には 喜々として学校へ向う子供達の元気な姿があふれていた。およそ70km南下したイラ・パンダの村から東への道をとって12分後に コットウ川の岸に着いた。川幅は400m ぐらいだろうか 流れがあるうとは

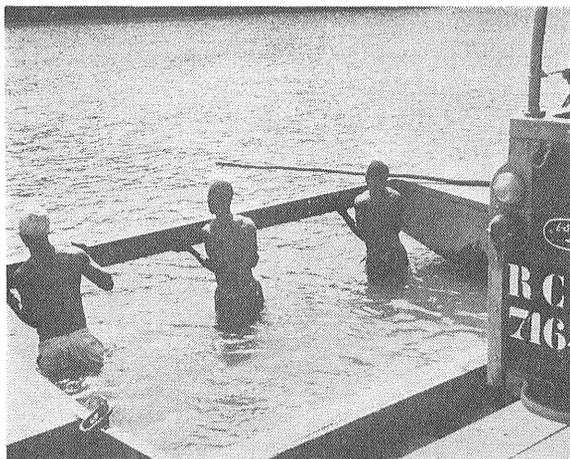
とても思えないほど 水面は静かである。岸辺の木蔭でのんびりと休んでいる男達が 私達を見て立上り 舳っている鉄製のフェリーに自動車に乗せる準備をはじめた。総勢9名のうち7名は実にたくましい身体つきをしている。

ランドローバー1台と15人ばかりの男を乗せたフェリーは 棹を巧みに操つる4人の男によって 音もなく岸を離れた。こんな大きな川で動力のないフェリーが使用されているのはまったく不思議だが それは 恐らく 付近に大きな町もないので 交通量や物資の輸送量が少ないせいなのだろうと思われた。

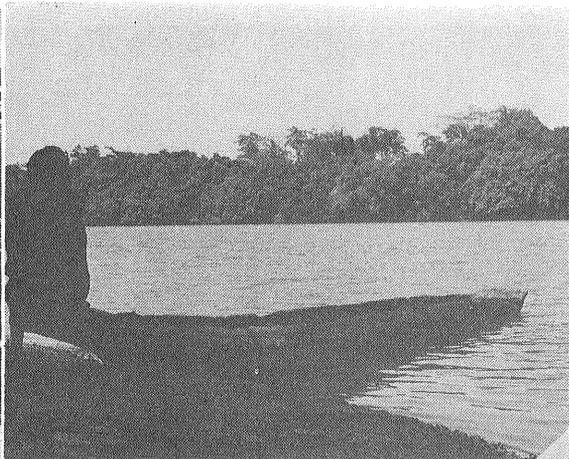
付近に人家もないこの渡しフェリーの運航時間は午前6時から午後6時までだが 従業員達は 仕事を終えてから 家まで歩いて帰るのだろうか。

フェリーは川の中程にさしかかった。棹を手にした 屈強の男達がいくら力んでも フェリーは まったく動こうとはしない。せいぜい深さ1mばかりの鉄の箱なのに その底は 川底にぴったりとはりついてしまった。それまではのんびりと雑談していた男達のうち6人が 服を着たまま 水に飛込んで フェリーを押しはじめた(第14図)。そして フェリーは また 静かに動きはじめた。まるで大井川の渡しを彷彿させる風景である。

いくら川幅が広いといっても 水が流れているとはとても思えないほどゆるやかに傾斜しているこの川では 上流から押流されてくる土砂が想像以上に川底に堆積するのだろう。これでは より重くなる動力つきのフェリーを使うよりは むしろ このような人力で動かすフェリーを使った方が 経費は高くついても 合理的かもしれない。



第14図 コットウ川の渡し人足  
川の中程で渡し舟の底が川底に接触して動かなくなると 人足達は水中に飛び込んで押す。川の一部では 人足達は 頭さえも水面に出ているが それでも一生懸命に押ししていた。



第15図 コットウ川の岸で見た丸木舟と老婆  
水面を見つめて動かそうともしない老婆の後ろ姿には 云いしれぬおびしさを覚えた。

2台のランドローバーを渡すのに1時間20分を費やした。忙がしい社会ではとても考えられないようなことだが人間らしい生活をしようと思えばあい 案外 こうした悠長さが一番大事なかもしれない。しかし目まぐるしさに飼い馴らされた多くの日本人には やはり こうした悠長さは仲々受け容れられそうにない。

対岸の水際には 色とりどりの無数の蝶が 乱れ舞いあるいは 一点に密集して動こうとはしない。蝶の産地として有名な国だけに たては蝶類のシモトエやシャラセスだけでも30種類以上におよび 豹の排泄物の上でしか捕えることのできない真紅のノビリス・ハドリアヌスやゼリカのほか きわめて多種多様の蝶がいるらしい。しかし 乾期である今は それらの美しい蝶も季節形態型に属するだけに 色は薄く 形も小さい。川岸で 朽ち果てた1隻の丸木舟が 水に半身を洗われている。その舳先に 老婆が1人 腰を下ろしている。動こうとはせず その視線はコットウ川の水面に向けられたままである(第15図)。その老婆が 何の目的でここに来ているのか また 何を思っているのか分からないが 逆光の中に浮ぶその姿は 何故かわびしげであった。木蔭で軽食をとった後 コットウ川に別れを告げた。道路は狭いけれども 行き交う自動車も数少ないのか路面はよく 時速60km ぐらいで楽に走れる。コウコウロウ部落を通り過ぎる折 数本のオレンジの木を見つけ車を木蔭に停めて 買うことにした。戸数はわずか6戸 オレンジの木は4本だが 道路傍には売物のオレンジが並べてあり 4本の木には 枝が折れんばかりに大きな実がびっしりとなっている。

100フラン(130円)硬貨を渡して ジャン・クロード

に交渉させてみた。 どうか木になっているのを売ってくれるらしく 男が2人 木に登って 大仰に枝を揺さぶりはじめた。こんなことをしては落ちたオレンジは潰れてだめだろうと思っていたが 大きな音をたてて落ちるオレンジは 不思議に潰れず またたくうちに 数100個になった。ジャン・クロードは 大きそうなのを選びながら1斗袋に 落ちたオレンジを入れはじめた。そして 袋一杯にした後で 100フラン硬貨を男に手渡した。いくら何でもこれでは悪いと思って さらに100フラン硬貨を ジャン・クロードに渡そうとしたが 受取らなかった。木に登った男が「メルスイ」といって 100フランを受取ったことから察すると 1斗袋に1杯100フランが相場なのだろう。多分 1個当りの値段は1円強ではないだろうか。

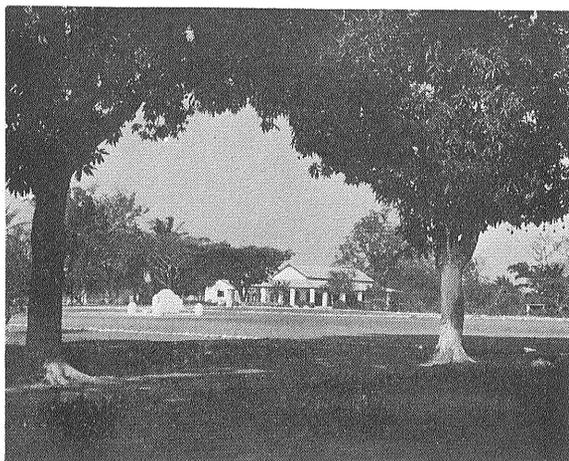
ナイフを一寸入れただけでとろけるような甘い汁が出るこのオレンジは この国へ来てから賞味したオレンジの中でも 最高の味であった。それにしても 木を植えただけで 肥料をやるわけではなし また 手入れをするわけでもなさそうなのに よくこんなに美味しいオレンジが実るものだ。こうした土地では 科学の力を拒否した方が 理想により近いものを産み出せるのかもしれない。

マンゴの木がぼつぼつ目につきはじめて間もなく 目的地のバクウマに到着した。この町も 例に洩れず 国道の両側に家が建ち並んでいるだけだが 学校も仲々立派だし 町全体が何となく落着きのある美しさと活気を感じさせる。

町のほぼ中心にある郡長宅は プーゲンビリアの花に囲まれた 一きわ美しい白亜の建物である(第16図)。鉄鋳床の所在地として広く知られているボゴアン出身である郡長のモリス・シビロ氏は 美人の奥さんよりも小柄だが 身のこなしも話しぶりも実にきびきびとして 気持がよく 精悍な容貌と引きしまった体軀からは 底知れぬエネルギーがほとぼしっているようである。

宿舎は 広場を隔てて 郡長宅と向い合っていた(第17図)。わずか2部屋の真四角な家で まったく変りばえのしない建物であるが その一隅には 水を浴びる場所があった。炊事場らしきものも見当たらないところをみると 元々 住宅として建てられたものかどうか分からないが 部屋の中にはベッドが2つづつ置いてあるので 旅行者用の宿舎として使用されていることは確からしい。

この町の出身であるバトウカーが 今日 男前に見える。 5年ぶりに故郷へ帰って来たというバトウカー



第16図 マンゴの深い緑とプーゲンビリアの真紅の花に美しく映えるバクウマの郡長邸 建国記念日その他の大きな行事は 白い石で囲まれた広場で行なわれる

にしてみれば その嬉しさやなつかしさはまた格別だろうし 男前に見えるのも そうした気持の表われかもしれない。 宿舎の玄関先に満載の荷物を降ろしてすぐ バトウカーは 町の東端部にあるという生家へ 車を走らせた。

日中の陽ざしはやはり強烈である。 白く濁った青臭い水で旅の垢と汗を流した後 道路傍の木蔭に椅子を持出して のんびりと夕暮を待つことにした。

人通りがまったくなかった宿舎前の路上が 午後4時を過ぎる頃から 急に賑わってきた。 学校帰りの子供達の中に裸同然の格好をした子供も居ればこざっぱりとした服装の子供が居るのと同様に 大人の服装も様々だが 一般に これまでに通って来た田舎の人達にくらべれば きちんとした服装をしている人が多いようだ。

それは 恐らくこの町が コーヒーと煙草の栽培で経済的により潤っているからだろう。 だが 道行く人々の肌の色や容貌や身体付きなどは様々である。 このことは 大して大きくもないこの町が この地方では 生活の場としてより恵まれた環境にあることを物語っている。

夕食後の一時 バトウカーは 少年時代を思い出しながら 「私は 小学校まで10km のこの道を 走って通学したのです」と 話してくれたが この国の人達のたくましさや強烈なバイタリティは 幼い頃からのこうしたことによっても 培われてきたのであろう。

片道20km 余の道を歩いて町へ買物に行く老婆 60余km 離れた町へ歩いて塩を買いに行くという男 そしてまた バトウカーが語った小学生時代の思い出 いろいろの面でより恵まれた生活環境に生きている私達ならば

最初から否定しようとする不便さや辛さを この国の人達は ごく当り前のこととして 受け容れ そして 不満顔を見せずに実行している。 便利さを知らないからだとか 未開地だからだといってしまうばそれまでだが私は そうした事実を目のあたりに見て 深く考えさせられることが多かった。

明日は 待望のバクウマウラン鉱床を見学する日である。 クランペルの宿で聞いた 「バクウマウラン鉱山会社は解散し フランス人技術者は追放された」というニュースが事実ならば 現地で地質鉱床や開発業務の説明を聞くことができないだけに 見学の意義はかなりうすれはするが その片鱗を見ることはできよう。

日没近く 美少女が2人 宿舎を訪ずれた(第18図)。 どちらも17才で 洋装の少女はアンナ 緑色の地に白の大柄な模様を染めぬいた民族衣裳をあざやかに着こなしたもう1人の少女はエジニニという名であった。 スタイルといい器量といい エジニニは これまでに逢った女性のうちでは 最高の美人であった。 「バクウマは美人の多いことで有名です」といったバトウカーの言葉は信用してよさそうだが 女性にくらべてハンサムな男性がいないのはどうしてだろう。 「天は二物を与えず」という諺の中には こういうことまでも含まれているのだろうか。 一般に 娘の容貌は父親に似るといわれるが この町の人達に関するかぎり こういう遺伝性は当てはまりそうにない。 まったく 不思議なことではある。

(筆者は 鉱床部)



第17図 バクウマの国営宿舎

第16図の郡長邸から徒歩5分ぐらいの所に建っている ふつうの民家と同様に 乾燥煉瓦を積み重ねた壁に萱草きの屋根を乗せただけのものだ



第18図 バクウマの宿舎に遊びに来た17才の娘 短か目のワンピースを着て靴をはいた娘は この町きってのモダンガールかもしれない